

大臣

次官

第八七號

冊作三月廿九日接受

主管通商局

海軍省

株資十社

大東新利洋行敷額書進達

之件

當港ト蘇州杭州間ニ於テ航江運漕ノ
 事業ニ從事スル大東新利洋行自若龍
 手ヲ引テ事業上ニ保護請願ノ儀ト爲シ
 別紙陳情願狀ヲ去大隈外務大臣閣下
 へ進達方多館へ願出テ付キ爰ニ右ノ進
 達候年御査閱相成度支

一右大東新利洋行ハ昨年其業務ヲ
 創始シトスルニ際シ帝國地方官ヲ種々ノ
 妨害ヲ受ケ爲メニ不勘損害ヲ被ルニ至リ
 ン事情ハ當時已ニ具收ニ及ビタル通ニ有之

在上海日本總領事館

其得共幸シテ同行ハ各種ノ困難ニ堪ヘ愈
 ヲ事業開始ノ運ニ至リ海未益々拮据
 業務ノ擴張ヲ謀リ航行ノ時間船隻ノ
 設備ノ船客ノ取扱等ニ関シ従前ノ習慣
 著敷改良ヲ加ヘタル結果トシテ類ニ世上ノ
 好評ヲ博シ今日ニ於テハ日米清ノ同業者
 中甚尙ノ信用品モ高ク船客ノ負教ニ亦
 ニ其多數ヲ占ムルノ實況ニ相成矣亦教月
 前ヨリ従来ノ支那汽船會社ハ追々其船
 隻ヲ引下ケタル爲メ同業者間ニ激烈ノ競
 争ヲ惹起シテ船隻ノ如キニ定額ノ半ニ減シ
 タル有様ニテ收支相償ハ尤ハ勿論毎月空敷
 幾多ノ資金ヲ注入シテ僅カニ堪ルニ持堪

スルノ業ヲ講スルノ外無之境遇ニ希矣然レモ競
争ノ對手タズト那流航合社ノ孰レモ既往數
年留地航路ニ於テ壟斷ノ利ヲ占メテ結果ト
シテ資本力屬實ナルニシテ久々營業上各般ノ規
模機關モ夫々整備シテ力者ナカ故ニ競争上
度モ疲弊ヲ感スルノ状ナリ飽マテ新會社
ヲ線外ニ肥殖シテ曩日ノ壟斷ヲ恢復セント
スルノ目的ヲ懷ク者ノ如ク相見、美次才ニ付キ
競争ノ前途全ク止那辺マラ進歩スルヤ今日
ニ於テ容易ニ自全ヲ立ルコト能ハサル状況ナ
ルヲ以テ其間ニ本邦流航合社ニ於テハ到底損
失ノ負擔ニ堪兼テ廢業ノ不得止ニ達スルキハ
教理上殆シト免セシテ勢ト相成ク然レモ右大

在上海日本總領事館

東新利洋行ノ航江業タルヤ戰勝ノ結果ト
シテ我ニ收メタル當國內河航行ノ權ヲ實行シ
ツ、凡レ唯一ノ企圖ニシテ營業上ノ秩序追々
整頓シタル今日ニ至リ空々ノ廢業ノ不幸ヲ
見ルカ如キ事アリテハ其影響スル所決シテ該
社一個ノ損失ニ止ラス而セテ一般ノ体面ヲ傷ツ
ケ本邦商民ノ將來亦固ニ於テハ企業心ヲ
沮喪シ愈々重墮屢息再ニ此類ノ經營ニ
尽力スル者容易ニシテ之ニ以テ長江航權ノ如
キハ永ク空權ヲ以テ終ルカ如キ結果、立至不
申哉ノ懸念相生美是業ハ同播ノ影響
トシテ暫ク之ヲ擱クハモ該航線廢止ノ為メ
目前必至ノ結果アリ云フハ、蘇杭外ニ於テ

此我專及居各地開設ノ事業ノ如キハ之レカ
 為メニ非常ニ其便宜ヲ失ヒ居留地ノ發達ハ
 該線ノ存否ニヨリテ甚ク連ノ度ヲ失スルキ
 ハ復々疑ヲ容レ其所ニ有之英日ソ帝國郵
 政擴張ノ舉ノ如キモ其ノ該線ニテ愈々廢
 減ニ歸シタル曉ニ忽チ郵便物運送ノ途ヲ
 失ヒ折角蘇杭兩地ニ新開シタル我郵便局
 モ空ク多餘ト其用ヲ均ラズニ至リ可申事
 該航線ノ永續ハ何レノ点ヨリ觀察ヲ下クモ
 最モ希望スル一儀ニ有之其就テハ此際我
 政府ニ於テハ航海獎勵法ノ精神ヲ一層振
 充シテ其係護ヲ特ク海洋ノ航行ニ身止ル
 下ナク吳淞江揚子江又ハ朝鮮漢江等ノ如キ
 外國内河ニ於テハ我航權ノ實行ニ對シテモ同
 様其係護ヲ與フルノ方法ヲ採ルカ若クハ帝國
 郵便總局係護ノ意義ニ據ルカ孰シニシテモ
 便宜之方法ヲ設ケ該線ニ對シ相成之御
 係護ヲ與ラレニト切望ニ不堪所ニ有之其
 別紙致致進達旁生政事情分具陳
 候敬具

在上海日本總領事館

明治三十年三月二十日

在上海

總領事 珍田 拾

外務次官 小村 壽太郎 殿



滬蘇杭甬航路保護ニ關スル諸願書

謹テ惟ミルニ明治二十七八年戰役ノ結
果清國內地ニ蘇州杭州重慶沙市ノ四港
ヲ開カレタルハ實ニ我帝國ノ名譽ニシ
テ對外貿易上最モ注意留心スヘキ事ト
恐察候依テ不肖龍干自ラ揚ラス馬關條
約ノ權利ヲ實行シ併セテ蘇杭甬州ノ帝
國居留地開拓者ノ先導タラント期シ
明治二十九年五月大東新利洋行ナルモ
ノヲ設立シ清國內河航船業ヲ開始シ先
上海蘇州間ニ汽船ノ駛航ヲ試行候處不
圖モ清國官吏ヨリ種々ノ口實手段ヲ以
テ之ヲ開始ヲ妨止セラレ殆ント半歳ノ

大東新利洋行

久シキ徒ニ空費ヲ重子漸ク當路諸公ノ
甚カラワル苦心ト盡カトテ仰キ辛クシ
テ營業ヲ開始スルヤ否ヤ直ニ同業者中
ニ劇烈ナル競争ヲ引起シ敵洋行ノ前後
ニ蒙リタル損失ハ實ニ夥シク殆ント一
私會社ノ堪ユル處ニ無之候然レモ此
思フニ此航業ハ純然タル國家的公共ノ
事業ニシテ外ハ國家ノ權利上馬關條約
ノ遂行ヲ要シ内ハ新開港地ノ經營上必
要不可缺ノ業務タルハ且前途ノ有望
ナルハ別紙具借書ニ開陳スル通ニ有之
候得者飽迄不屈不撓ノ精神ヲ以テ更ニ
進テ具改良擴張ヲ行ハント企圖候而ノ

之カ實施ヲ爲サンカ爲ノ故洋行ハ之ニ
要スル擴張費八万五千弗ヲ本邦民間ヨ
リ募集シテ年間ノ損失準備金額七万四
千九百零壹弗叁拾六仙ノ御補填ヲ我政
府ヨリ仰キ度請願ニ有之候伏シテ願ク
ハ別紙請願具情書ニ開陳スル處ノ情状
及ヒ微意ノ在ル所ヲ悉サレ航海獎勵貨
易擴張ノ御精神ニ依リ請願ノ主旨御聽
許相成度別紙請願具情書及擴張豫算表
相添ハ此致奉懇願候也

明治三十年三月十九日 大東新利洋行白岩龍甫

大東新利洋行

外務大臣伯爵大隈重信殿

閣下

上海蘇州杭州間航通業實況及
其改良權張ニ關スル諸願具情書

大東新利洋行

3-2118

0167

上海蘇州杭州間航通業實況及其改良擴張ニ関スル請願
具情書

上海蘇州杭州三港間ニ於ケル 航通業ノ實況ヲ具
陳セトスルニ當リ先ツ江南水利ノ大畧蘇州杭州ノ形勢并ニ一般航業
ノ情況ヲ述ブ

江南水利蘇杭新開外ノ情景

抑モ江蘇浙江二者ハ支那全國中尤モ水利ニ富ム地ニシテ就中此三港
ハ楊子江運河太湖并ニ錢塘江等ノ水域ニ屬シ土地平曠ニシテ水ノ供
給尤モ裕カシ且ツ其利用ニ於テモ殆ント人ユラ盡シ大ニ運河ヲ以テ幹
支ノ水道ヲ貫通スル外溝洫處在蜘蛛ノ如ク天然ノ妙人ノ利ヲ併セテ
水運ノ盛ナル一ニ此地方ヲ經歷スルモノ、發見ク所謂南船北
馬ト稱シ此地方ノ旅行者ハ盡ク船ニ資リ宿驛ニテ旅舎ナク交通
運輸全ク水利ノ便ニ賴レリ其地味モ亦頗ル豊腴ニシテ米綿花及桑ノ

大東新利洋行

最良富マ產出セリ之ヲ以テ江浙兩者ノ直税ハ八者ノ全額ノ半以上ヲ
負擔シ稱シテ支那財賦ノ泉源トセリ而シテ蘇州ハ江蘇省ノ首
府杭州ハ浙江省ノ首府ニシテ共ニ其ニ地方財貨ノ集中地トシテ對外
貿易場トシテ上海ノ如キ敏系榮ヲ期スヘカラスト尾尾内地開港場トシ
テハ敢テ長江沿岸諸港ニ讓ラサルベク若シ其施設經營ヲ悞ラスニハ
我戰勝ノ記念トシテ永ク南清内地貿易ノ新根據地タルヲ得ベシ
蘇杭兩州ヲ開クニ當リ馬関條約ニ由リテ此間ノ汽船航通業ヲ約
定シタルハ頗ル緊要不可缺ノ事ニ屬シ當局諸公ノ明ニ謝スル所
ナリ若シ當時此兩地ヲ開テ我航通權ヲ得ザリシト假定センカ
開港ハ殆ント有名無實ノモノトナルハ如何トナシハ道路モナク旅舎
モナキ陸上ノ交通線ヲ有セサル此新開港場ヲ盛ナラシメント欲セハ
是非トモ水運ノ利ニ賴ラサル能ハス水運ノ利ニシテ果シテ全ク清國ノ
主權ノ下ニ在リテ本邦汽船ノ航通ヲ許サルハ新開地ノ發

達隆盛ハ得テ望ムハカラス蓋シ貿易及ヒ殖民ハ交通運輸
線ノ進張ニ伴フモノナレハナリ

蘇杭兩州貿易ノ前途ハ邦人ノ尤モ注意シテ聞カント欲スル所
ナルハ在ノ一項ハ以テ具前途ヲトスルニ足ラン杭州新開關ノ報告ニ
依リ同地開港後一千九百十六年十月ヨリ十一月ニ至ル三ヶ月間ニ於ケル
通關貨物ハ輸出入ヲ併セテ其價額貳拾貳萬七千三百九十六兩ニ上
レリ而シテ之ハ汽船ニ依リテ稅關新設後ニ初メ運搬セラレタル貨物
ニシテ(從來漁船ノ往復ニ貨物ノ積載ヲ許可セザリシ)此他旧來ノ價法
ニ由リ民船ニ積載シ厘金ヲ通過シテ出入スルノ商貨ハ大凡之ニ六七
倍スレト云フ蘇州稅關ノ報告ハ未タ詳カニセサルモ亦杭州ト弟兄
ノ間ニアラン之ニ由テ之ヲ見ルニ將來兩地ニ居留地ノ建設セラレ汽
船ノ交通頻敏系ヲ加フルニ至ラハ隨テ貿易ノ繁盛ヲ來タレ輸出入ノ
商貨モ思フニ著大ナル増進ヲナサン其前途頗ル多望ナリト云フベシ

大東新利洋行

愚見ニ由テハ蘇州ハ織物ノ名産地ニシテ我貿易ノ有望ニ品タル繭ノ
産地也錫毎年此地繭ノ産出高愈日方兩ノ上ニ出ラ又此地ハ米ノ産地ニシテ
年々此地ヨリ北者各地ニ分輸スルノ數屢五百萬兩ニ及ブト云フ
控ヘ杭州ハ生糸茶ノ名産地ニシテ本邦商人カ蘇州外ニ手ヲ展ヘシ
スルニハ先ツ本邦ノ經驗資本ニ富ムル真正實業家カ親シク未遊
シテ其實況ヲ視察シ製絲及繅絲紡績ヲ初メ絹綿製織等ニ関スル文
明的機械工業ニ我特有ノ技術ト熟練ヲ以テ清人ト共同ノ事業
ヲ經營シ一面ニハ彼等ヲ啓發シ一面ニハ漸次ニ我商權ヲ植付クルノ
方法ニ出ツル目下ノ要務ニシテ且最モ有望ノ業タルヲ信スルナリ

上海蘇州杭州間一般航業ノ情況

馬關條約前ノ航業 蘇杭兩州ト上海ノ間ニハ蒸氣船ノ航
通ヲ開キタルハ今ヨリ數年前ニシテ載生昌ト稱スル會社ニ由リテ創
始セラレ同社ハ清國政府ノ特許商人トシテ独リ龍土斷ノ利ヲ占メ
タルカ其後蘇州線ニ於テハ河輪局杭州線ニ於テハ芝太富ト

名ルニ社起リ何レモ半官半民ノ始キ組織ニテ載生昌ト相並ニテ
 營業セリ馬關條約ノ締結ト共ニ此間ノ航路ハ我ニ由テ開放サレ
 外人自由競争ノ下ニ置カレタリ是レ實ニ此航路ノ大進歩史タリ
 蘇杭州開港後ノ航業 明治廿九年九月十五日蘇杭西州ノ開
 港セラルヤ 敵洋行ハ其第一日ニ先フ蘇州ニ向テ本邦汽船定期
 航通ヲ開始セリ是レ實ニ馬關條約ノ賜ニシテ長江航路ヲ除
 キ外國人ニシテ支那内地ニ航船業ヲ營ムモノハ實ニ之ヲ以テ嚆
 矢トス 敵洋行ニ繼イテ起リタル米人名下ノ彙利公司トナスニ清人
 ノ組織ニ成ル源裕公司ト稱スル新會社ヲ加ヘ尙ホ之ニ從末ノ載
 生昌及河輪局ヲ併セテ都合五會社トナル條ノ航路ト有教ノ貨客
 ニ對スル五個ノ會社ハ忽チ競争ヲ引起シ運賃ハ直ニ平時ノ三分一
 迄ニ低減シ競争ノ劇烈ナルヲ三月其結果彙利公司先ツ倒レ
 河輪局繼テ解散シ源裕公司モ亦蘇州航路ヲ中止シ杭州線
 大東新利洋行
 ノニ改メタリ因テ昨年々末ニ至リテハ載生昌ト 敵洋行 二社ノ外河輪
 局ノ替身トシテ現レタル日新昌ト稱スル一社ヲ併セテ三會社トナリ運
 賃モ平時ノ半價迄ニ復シタリ目今尙右半價ノ運賃ヲ以テ競争
 ヲ打續ケツアルガ將來尙大競争ヲ引起スヘキ勢アリ如何トナ
 トハ毎年清曆ニ三月ヨリ四五月迄ハ此間航業ノ最モ繁榮ヲ
 フ極ムル季節ナリ源裕公司モ更ニ蘇州航路ヲ通スヘク米人
 名下ノ會社モ再興ノ計画アリト聞ク(曩ノ彙利公司ハ其實
 清人ノ營業ニシテ米人ハ名ノニテリ此再興ト云フモ前會社ハ既ニ解
 散シ更ニ他ノ資本家ニ由リテ米人ノ名ヲ籠テハントスルモノ也)
 然レハ目前再ビ昨年十一月比ノ競争ヲ再現スルモ知ルヘカラス
 茲ニ競争ニ因テ交通上現ハレタル一進歩ハ注意スヘキ事ナリ信ス
 從來載生昌等特許商ノミニテ營業セタル當時ハ支那人ノ
 事トテ殆ント規則正シキ航通行ハス單ニ營業ノ利益ノミヲ負リ

テ十数隻ノ或舟ヲナス等隨テ其發着時間至テ不定ニシテ僅カニ六十哩ノ航路ニ通常晝夜以上ヲ費シタリ然ルニ敵洋行ハ快速ナル汽船ニ由リ短縮ル時間規則正レキ往復ヲ初メタルヨリ一時皆競フテ之ニ倣ヒ今ハ各社共大抵十四五時間ヨリ十八九時間ノ間ニ乘往スルトナレリ凡ニ營業諸會社表ヲ掲ク

航業諸會社表

名稱	國別	總局位置	資本高	創立年月	航路	使用船數
大東新利洋行	日本人	上海	四〇〇〇圓	明治二十九年五月	蘇州 杭州	五隻
載生昌	清人	上海	不詳	明治二十九年四月	蘇州 杭州	十五六隻
源裕公司	清人	上海	不詳	同二十九年三月	杭州	七隻
日新昌	清人	蘇州	不詳	同二十九年一月	上海	四隻

已ニ倒レル會社ハ左表ノ如シ

名稱	國別	航路	創業年月	廃業年月
芝太富	清人	杭州	明治二十七年五月	明治二十九年十月
河輪局	清人	蘇州	同二十八年三月	同二十九年十二月
彙利公司	米人	蘇州	同二十九年八月	同二十九年十一月

又將ニ起ラントスルモノハ

名稱	國別	航路
匯利公司	米人	蘇州

營業ノ状況
 載生昌ハ多年ノ經驗ト資本ヲ有スレバ杭州航路ニ於テ源裕ニ讓蘇州線ニ於テ敵洋行ニ讓レリ日新昌ハ新起ニシテ資本モ少ク敵トスルニ足ラズ敵洋行カ蘇州線ニ於テ營業ノ状況盛ナルハ創立開業ノ際既ニ幾多外交上ノ問題トナリ及テ一般ノ廣告トナリタルトシテ本邦人ノ營業トシテ清人ノ腦髓ニ信用ヲ置カシムルコトヲ得ルト申船ノ構造新奇寬宏ニシテ一隻百五十他會社

此類ナキ所及貨客取扱ヒノ丁寧ナルト規則正シキ等ノ諸莫ニ在リ似タリ

船舶ノ構造

推進器ノ種類及容積 聯成單成各種ノモノアリトモ皆暗車
製セシテ外車ヲ用ユルハ尤モ適當ナラシ何トシハ蘇杭間ニ往ルル小
汽船ハ皆曳船様ニ製セラレ噸數モ至テ少ク四五噸ヨリ十二三
噸迄ニシテ荷客ハ之ヲ曳船ニ積込ニ蒸氣ハ單ニ汽罐ト石炭庫ヲ
握付ケタルニ若シ外車(後車)製トナシ荷客ヲ汽船ニ積載シテ
曳船ヲ用ユス駛行スル様製セラルバ第一石炭ヲ省キ第二速力ヲ
早メ第三航行ニ便ナル等ノ益アリ將來改良ニ必要ナル莫ト思フ
速力 大抵曳船ヲナカスレテ時間ニ五哩曳舟ヲ四隻ヲナレテ四哩内外
吃水 四尺以内
船價 新造一隻ノ價格大約三千兩ヨリ五千兩迄
艘數 上海蘇州杭州湖州常州ノ間ニ用イラレアルモノ大約四十隻

大東新利洋行

航路

第一線 上海蘇州間 寄港地ナシ 航路六十哩
第二線 上海杭州間 寄港地嘉興嘉善 航路百十五哩
第三線 蘇州杭州間 寄港地吳江石門 航路九十五哩
右三角形幹線路(馬関條約ニ由テ約定セラレタル航路)
一蘇州ヨリ無錫ヲ經テ常州ニ至ル 航路三十二哩
一蘇州ヨリ湖州府ニ至ル 航路十五哩
一上海ヨリ吳淞口ニ至ル 航路十二哩

右分派支線路

敵洋行 營業ノ實況

創立ノ由來 馬関條約ニ依リテ約定セラレタル蘇杭上海間
汽船航路ハ從來ニ官商特許壟斷ノ利數トナリ居タルカ爲メ馬
関條約ノ公布ト共ニ指テ此利鼎ニ添フントシテ此間ノ航業ニ從

事セニテ企ツルモノカラス上海居留邦人果ハ二十八年九月已ニ此計
画ヲ立テタリ二十九年二月ノ交ニ至リテ清人ノ中資本ヲ騰出シテ
本邦商人ノ名ヲ借り此業ヲ營メント企ツルモノカラス居留邦人
其々等ハ已ニ此計画ヲナセリ當時一方ニ在リテハ上海及北京ニ於テ
此間航路ノ問題ニ付テハ西國政府ノ交渉ヲ重ク子清國政府ハ
頑迷ニモ種々ノ口實ヲ設ケテ飽迄此航路ノ開始ヲ妨ケ
馬關約定ノ一部ヲ蹂躪セント試ミタル然ルニ此等居留邦人ノ爲
スルヲ見ルニ其設計往々庸淺ニシテ基礎ヲ鞏固ナラス國家重要
權利問題トシテ各種ノ支障ヲ排シ此業ヲ遂行スルノ見込ミニ之
レキノミナラス其或ハ笑ヲ外人ニ貶シ辱ヲ清人ニ招カンコト也是
不肖カ自ラ搦ラス清人ト合資ノ組織ヲ以テ同年五月 敵洋行ヲ
起シテ此業ニ當ラント試ミタル所以ナリ

創業ノ經過 蘇州航路開始ニ付テハ馬關條約ニ確定セルニモ

大東新利洋行

拘ラス清國政府カ言ヲ左右ニ托シテ實行ヲ妨ケ兩國政府ノ間ニ
一年有餘ノ交渉ヲ費シ漸クニテ領事館ノ設置トナリ海關道
ノ任命トナリ續テ明治二十九年九月廿五日ヲ以テ税関ノ開關トナリ
辛フシテ發表セラレタル滬蘇杭行船章程ノ破棄問題トナリ
政府ニ於テ少カラサル手数ト苦心ヲ尽サレタルモ一方ニ實地問題ト
シテハ 敵洋行カ蘇州支局ニ於ケル官吏間入事件トナリ關係清人ノ
入牢逮捕トナリ貸家主人ノ烟店封鎖トナリ清政府カ無法ナ
ル抵抗モ亦極マレリト謂スレ當時此事タル固ヨリ大事ニアラスト
且ハ國家權利ノ關スル所ハ實ニ尠小ナラス殊ニ國家カ民命
ヲ賭シテ買得タル特權ヲ實際受用シ得ヘキヤ否ハ我同胞ノ深ク
氣遣ヒタル所ナルヲ以テ一時去上ノ注目ヲ匿キタルカ敵洋行 創業
ノ主旨モ亦全ク國家利權ノ上ニアリテ存スルヲ以テ自ラ搦ラス進ン
テ此難關ヲ打破シ聊カ新聞貿易場ノ先導ヲタラシメテ期シ

タリキチニテ唐商ノ交渉措置其直ニキテ得テ敵洋行カ創立ヨリ
營業ノ開始ニ至ル迄 殆ント半歳ノ久シキ内外ノ困厄ニ遭ヒ已ニ
倒ルニ重ントシテ總カニ維持シ得タルモノ今ヨリ之ヲ回思スルハ眞
不幸中ノ幸福ナリ外務省及北京公使ノ本件ニ就テ盡サレタルハ
其詳細ヲ知ルニ由ナレト吳氏上海總領事珍田樞臣氏カ地方ニ於ケル
交渉上或ハ平夜病ヲ犯カレテ地方官ト并難未往セラル、如キ具
公務ニ盡ク瘁セラレタルハ 敵洋行ノ親シク見テ以テ感謝ニ堪ハサル
所ナリトス

營業開始後ノ經過 敵洋行ハ創業ニ於テ已ニ非常ノ困厄ニ遭
ヒタルカ總カニ開キ得タル航路(上海蘇州間)ハ勿クシテ從未
此間ヲ往來セシル諸人ニ會社(或生昌河輪局)ト新ニ此特權
ニ均沾シテ起リタル米人會社等ノ間ニ於ケル營業上ノ競争ト
ナリニテ月ナラズニテ終ニ其二社(河輪局及米人會社)ハ倒レタル也

大東新利洋行

新ナル競争者ハ已ニ現ハレ(日新昌)尚此上ニ競争者ヲ添ヘント
スルノ執アリ(米人會社再興)サレハ再未荷客ノ運賃ハ依然競争
ノ中ニ在リテ平時ノ半額ヲ以テ營業セリ杭州航路モ同様開闢以
未直ニ競争ヲ引起シ新起ノ源裕公司ハ僅ニ三月間ニ在リテ
千兩ノ損失ヲナセリト云フ(是ヨリ先キ邦人某々等ニ因テ計畫サレタル
二三ノ會社ハ 敵洋行 カ創業ノ困厄ヲ常メタル間ニ又ハ營業開始
後ニ於テ何レモ中止消滅セリ)形勢如此クナルヲ以テ當時 敵洋行 ハ直ニ杭
州線路ヲ開クノ豫定ナリレモ姑ク時機ヲ見合セ同航路ノ開始ヲ
延期スルコトセリ

現時營業ノ收支損益 右次第ニシテ創業中即チ營業ノ
開始ヲナスコトヲ得サリシ間ニ於テ費消シタル金額ハ別トシテ營業
開始後今日迄ニ蒙リタル損失ハ一ヶ月平均九千兩ノ上ニ出
テニ營業收支ノ實況ヲ表示ス

上海蘇州間航路5月間營業收支表

但每日兩地出帆

備用汽船四隻

支出之部

一 金叁千叁百零七兩六拾六仙

内譯

一 金四百八拾兩

船員給料

汽船一隻付1ヶ月金百貳

拾兩但乘組員船長棧関手火夫水手雜役計八名ニ對スル給料食費并、每航海ニ酒錢ト称スル價例上ノ諸給ヲ

合計

一 金九百兩

石炭質一航海用量四噸時價一噸七兩五拾

仙三十日間ノ用量百貳拾噸

一 金叁百兩

船内各部ノ需用品料 但極極油石油其他諸

耗殺費一航海ニ付金拾兩三十日分

大東新利洋行

一 金拾兩九拾六仙

船舶噸税1ヶ月分

一 金壹千百拾叁兩玖錢五厘

營業費 但上海本局蘇州支

局營業店費雜給1ヶ月分

一 金五百零叁兩四拾六仙五厘

船舶修理及臨時費

合計金叁千叁百零七兩六拾六仙

收入之部

一 金貳千叁百零貳兩五拾叁仙

貨客搭載運賃及船費

差引不足金壹千零々五兩拾叁仙

營業上ノ損失

但右ノ開業以來五月間ノ營業收支ノ通算シテ利益表ナリ

(杭州航路ハ等々)

備考

一 乘客運賃是各ニ付上等貳兩中等壹兩下等七拾仙

一 貨物運賃一噸ニ付貳兩貳拾仙

右ハ平時ノ運賃價格ニシテ營業收支ノ表出セル金額ハ實際收入ニシテ即チ貨客トモ此價格ノ半價以下ニテ取扱タルモノナリ若シ之ヲ平時ノ價格ニ復スルモ見ルハ其收入額ノ倍以上ニ上レ先ツ之ヲ二倍ト見ルモ尚四千六百零五兩零六仙トナル即チ營業支出費ヲ引去リ尚志々月間志々千貳百九拾七兩四拾仙ノ利益金ヲ見ル

杭州航路 ハ通信者トノ約定ニ由リ明治三十年一月より仮實行同月一ヨリ實行セリ通信者ヨリハ上海蘇州間ニハ毎日上海杭州間ニハ每週一回以上ノ郵便送義務ニ對シテ各々年ニ貳千四百兩ヲ下附サルノ約定ナリ 敵洋行ハ元來一日モ速カニ上海杭州間ノ航路ヲ開始セトスル希シキアリ 偶々郵便送送ノ命アリ同時ニ前途ノ下附アリテ通信者ニ於テモ此航路開始ヲ補助セラル、精神ヲ以テ約定書案ヲ示サレタルヨリ 敵洋行ハ進テ之ニ調印シ下附ノ金額ハ悉ク之ヲ杭州線路ノ經費ニ充テタリ然レ當時ノ豫算ニテ右ノ金額ニテ略ホ具經費ノ償フヘヤ

大東新利洋行

見込ナリレカ實際施行ノ結果尚毎月七八拾兩ノ不足ヲ現セリ其理由ハ畢竟今日ノ如ク週一回ノ往復ニテハ到底貨客ノ便益ヲ與フルノ能ハス從テ殆ト卓ニ郵便物ノミヲ搭載シテ往復スノ有様ナルニ由レリ且目下必要ノ燃料タル石炭ノ價格騰貴セルモ亦具不足ヲ増セル一因ナリ

競争ノ前途 今此營業ノ損失ヲ蒙レル主因タル競争ノ將來何レト具進進クヤ又具何時迄繼續スヘキヤヲ見定メテ會社經濟ノ方針ヲ定ムルハ尤モ急要ノ事ナリ 靜カニ此競争ノ前途如何ヲ考フルニ資本ニ裕カニ商業ノ損失ニ案外感レノ鈍キ諸人ノ事ナシ尚今後半年一年ノ間ハ隨分新起ノ競争者ヲ生セカク保スル競争ノ程度モ或ハ一時零價ヲ以テ貨客ノ運搬ヲナス迄ニ至ルモ亦未タ知ルヘカラス而シテ試ニ敵手ノ實力如何ヲ問フニ載生昌(此社ハ數年開墾斷ノ巨利ヲ占メ今日ハ具資本モ亦大ナリ)ヲ除クノ外ハ大抵各社

9

トモ碇固タル基礎成算ヲ有テニアラス殆ト一起一朴ノ勢トナルヘク我
具間ニ屹立シテ能ク營業ヲ維持繼續シ得ルハ終ニハ載生昌等ニ
ノ會社ト聯名條約ヲナス一長江ニ於ケル三大洋船會社ノ始クナルニ至ル
ヘク其時機ニ及ハシ經濟モ立チ營業モ自ラ安固ナルニナス之ニ由リ得
ル所利益モ亦少カラサルヲ見ル只其時機ニ達スル迄ノ間始終新起
ノ敵ト鋒ヲ交ヘテ莫大ノ損失ヲ受ケル營業ヲ支持スルハ中々
一私會社カヨテ常資本ノ能ク堪ヘ得ル所ニ非ラズ況シテ敵洋行ノ
如キ創業ノ際已ニ資本ノ一部ヲ空費シタル上開業後半年餘
ノ日月ヲ競争ノ間ニ支持シテアルモノニ於テラヤ

營業ノ見込及改良擴張ノ必要 然ラズ營業ノ前途見込ナキ
カト云フニ決シテ然ラス今日迄ノ營業成績ヨリ視ルモ多年ノ經
験信用ヲ此航路ニ有スル載生昌ト并立シテ我社ノ成績ハ彼ト謀
ラズ河輪ヨリ利益諸會社ノ相續イテ倒ルル中ニ立テ敵洋行ノ益々

大東新利洋行

顧客ノ信用ヲ高メソナル一前ニ述フル所ノ如シ且ツ今日迄ニ得タル
實驗ニ依ルニ本業ノ如キハ邦人ノ清國ニ於ケル事業トシテ將來
尤モ有望ノモノタルヲ信セリ蓋シレ風俗習慣ヲ異ニセル外國ニテノ
事業トシテ我ニ不利ナル矣アリト思ヒ我彼ニ優ルノ要矣幾多
アリ第一清人ノ機械的技術ニ拙ナル一第二清人ノ時間規則等ヲ
精密ニ守ル能ハサル一第三會社の事業ノ經理ニ拙ナル一經費
ノ數多ナル一等ナリ上海蘇州間航路ノ如キ今日ノ儘ニテモ營業
業ノ景況ハ常ニ彼等ノ右ニ出ツ然レモ上海蘇州間航路ノニ由テ
競争ニ堪ヘ經濟ヲ支持セトスルハ策ノ尤モ拙ナルモノニシテ必ス進
テ上海杭州間航路ヲ日々定期ノ往復トシ更ニ蘇州杭州間ノ
航路ヲ開テ三角形貨物通航路トセカラス如此スルハ船舶ノ
配備營業ノ費用ニ少カラサル便利ヲ與フルハ固ヨリ明白ノ事ナ
リトス故ニ今若レ後ニ具スル所ノ改良擴張方案ニ由リ上海蘇州

10

杭州間ニ三角形ノ定期線路ヲ開クハ營業上後令一時ノ競争ハ免レストスルモ終極ノ勝利ハ優ニ我ニ歸シ我ハ此間航業ノ改良者トシテ兼テ其盟主タルヲ得ヘク隨テ荷客運賃ヲ始メテ乃事我ニ由テ左右スルヲ得ルニ至ルヘシ
 今且改良ノ要點及擴張ノ程度ヲ左ニ求ム

改良ノ要點

一 汽船或船ヲ改メテ船尾外車製ノ新形汽船數隻ヲ作り專
 パラ快速靈便ヲ主トシ重ニ貨物乗客及郵便爲替ノ速
 達ヲ図リ兼テ運賃ノ低廉ヲ期スル(前記船舶ノ項參看)
 一 船長機關手ハ清人ヲ廢シテ悉ク日本人ヲ用ズル(清人機械的
 技術ノ拙ナリ且時間人命機關經濟ニ没智識也)

擴張ノ程度

一 上海蘇州間 毎日航行(但從來未通) 備用汽船四隻
 大東新利洋行
 一 上海杭州間 毎日航行(從來未通) 備用汽船七隻
 一 蘇州杭州間 毎日航行(未開) 五 四隻

右三角形定期線路用汽船十五隻

右ノ改良擴張ヲ行フニ船舶新調ノ爲メニ金八万五千弗(別紙
 豫算仕譯表ニ詳カナリ)ノ擴張費ヲ要シ同時ニ凡ソテ年間競
 争ノ間ニ立テ現今ノ如ク損失ヲ重ヌルモノト見做シ三角形航
 路ニ於テ一ヶ年ニ受クヘキ一切ノ損失準備金額叁万七千四百五
 十弗六拾八仙(別紙豫算仕譯表ニ詳カナリ)ヲ要スルニ由リ此ニテ
 年ノ金額七万四千九百零壹弗叁拾六仙ヲ合セテ合計拾五万
 九千九百零壹弗叁拾六仙ノ金額ヲ資本トシテ豫備セラルヲ得
 ス蓋シ此資本金額ヲ豫スルニ非ラサレハ未タ上ニ示ス所ノ改良
 擴張シテ完全ナル結果ヲ得セシムル能ハサルナリ果シテ此資本
 金額ヲ豫備シテ之ニ當ルハ二年以後後ニ平時ノ運賃

ヲ以テ營業スルモノトシテ具得ル所ノ利益金ハ右ニテ年間ニ損失
スヘキ金額ヨリモ更ニ多額ノ収益トナルヲ別紙豫算仕譯表
ニ示ス所ノ如シ敵洋行ハ創業ノ間ニ在リテ已ニ清國政府ノ妨碍
阻撓ニ遭ヒ今又營業上ノ競争ニ會ヘリ然レモ此前途有
シテ事業ニ對シ飽迄不屈不撓ノ精神ヲ以テ此際更ニ一鞭
ヲ加ヘ奮勇テ改良擴張ノ事ニ從ハントス亦只馬關條約ノ
特定措ニ對スル熱心誠實ナル維持者タラニテ期スルニ
外ナラス已ニ前記シタル如ク敵洋行ハ會社ノ組織合資ヲ以テ
成リ創業資本金ノ半ハ諸人ノ募出ニ係レモ是當時止ムヲ
得サルニ出テタルモノニシテ之ヨリ進テ我々資本ヲ注入レ之力改
良擴張ヲ圖ラントスルモノナリ

大東新利洋行

建設セルハ實ニ明治二十七八年ノ役ニ由テ開カレタル清國地ノ四港ナ
リトス帝國領事館既ニ建設セラレ郵便局亦新設セラレ
居留地モ亦將ニ確定セラレトス此時ニ當リテ依ニ上海ト我々
開港場トノ間ニ本邦汽船ノ航路トセントシテ本邦人ニシテ此地ニ來リテ
經濟セントスルモノハ言語ニ通セス風俗ヲ異ニセル友那人ノ船ニ依
ラカルヘカラス具不便不利ト不經濟トハ一タヒ當地方ヲ經歷
シタルモノ皆悉知スル所ナリサレハ新開港場ニ邦人ノ經
商発達ヲ望マハ必ス先ツ本邦汽船ノ航路ヲ盛ナラシムル
ヘカラス若シ然ラサルハ折角有望ナル土地多ク開イテ帝國居
留地ヲ建設シナカラ具實權ハ悉ク清人及歐米人等ノ掌
中ニ占有セラレ、ニ望ランノミ豈遺憾ノ至リナラスヤ蓋シ此間ニ
於ケル航業ハ純然タル國家的公共事業ニシテ又實ニ日
清貿易ノ先導者トナルモノナリサレハ本館杭州日本汽船ノ

上海蘇州杭州間航路擴張豫算仕譯表

上海杭州間航路擴張收支務等

但每日兩地出帆 備用汽船七隻

支出之部

一 金四千六百拾四兩八拾仙

内譯

一 金八百拾兩 船員給料 汽船一隻付一月金壹百貳拾

兩 但乘船員船長機関手火夫水手雜役計八名

一 金壹千叁百五拾兩 石炭費 但一航海用量六噸壹噸付

七兩五拾仙三拾日間ノ用量百八拾噸

一 金五百貳拾五兩 船内各部ノ需用品料 但板棹油石油其他

消耗費一航海舟金拾七兩五拾仙三拾日分

一 金拾九兩八拾仙 船舶噸稅

大東新利洋行

一 金壹千兩 但杭州分局ニテ所營業店費雜給壹ヶ月分

一 金八百拾兩 但船舶修理費及臨時費

合計 金四千六百拾四兩八拾仙

收入之部

一 金四千四百五拾兩

貨客運賃壹ヶ月間平均見積

内譯

一 金四千叁百貳拾兩 但乘客運賃平均兩地合ヒテ壹百貳

拾兩見積 壹名壹兩貳拾仙ノ割三十日分

一 金貳千百叁拾兩 但貨物運賃併、或船賃

合計 六千四百五拾兩

差引純益金壹千一百叁拾五兩貳拾仙

右公平時ノ運賃ヲ以テ算出シタルモノニテ現今ノ競争ニ由リテ

之ヲ半額ノ收入ニ止ルモノト見ルルハ具損失如凡

一支出金四千六百拾四兩八拾仙
 一收入金叁千貳百貳拾五兩
 差引損失高壹千叁百八拾九兩八拾仙

大東新利洋行

蘇州杭州間航路擴張收支豫算

但各會西地出帆 備用涼船四隻

支出之部

一金貳千五百七拾五兩九拾六仙

内譯

一金四百八拾兩 船員給料 汽船一隻、付壹ヶ月全百貳

拾兩但乘船員船長機園手火夫水手雜役計八名

一金壹千貳拾五兩 石炭費 但一航海用量之噸一噸、

付七兩五拾仙三ヶ月間ノ用量百五拾噸

一金叁百六拾兩 船内各部ノ需用品料 但機械油石油其他

消耗雜費一航海舟全拾七兩五拾仙三ヶ月分

一金拾兩九拾六仙 船舶噸稅

一金壹百兩 營業諸費 但蘇州杭州共已支局凡ノ

以上此間航路ニ付テ別ニ旅費ニ當テス所地支局ニ事務員數名
ヲ添テ止ミレリ

一金五百兩 船舶修理費及臨時員

合計貳千五百七拾五兩九拾六仙

収入之部

一金叁千七百兩

貨客運賃(各月間平均見積)

内譯

一金叁千兩 乗客運賃但平均西地合セテ百ト見積

壹名壹兩之割三十日分

一金七百兩 貨物運賃并ニ曳船賃

合計叁千七百兩

差引利益金壹千百貳拾四兩零四仙

但右ハ平時ノ運賃ニ申リ算出シタルモノニシテ若シ競争ニ申リテ時

大東新利洋行

ニシテ半額ノ收入ニ止ルモノトスル中ハ其計算如左

一支出金貳千五百七拾五兩九拾六仙

一収入金壹千八百五拾兩

差引損失高七百貳拾五兩九拾六仙

三角形航路擴張費豫算

一 金八万五千弗

内譯

一 金四万五千弗

十 蒸涼船八隻新調費

一 金壹万八千弗

新形後車付蒸涼船八隻新調費

一 金貳万弗

貨客船八隻新調費

一 金貳千弗

杭州支店開設費

合計金八万五千弗

大東新利洋行

三角形定期航路擴張ニ対スル營業競争

損失見積

一 金叁千貳拾弗八拾九仙

内譯

一 金壹千零五拾叁仙

上海蘇州間壹月損失高

一 金壹千叁百八拾九弗八拾仙

上海杭州間壹月損失高

一 金七百貳拾五弗九拾六仙

蘇州杭州間壹月損失高

合計金叁千貳拾肆弗八拾九仙

三線路壹ヶ月損失高

此壹年間ノ損失高

金壹万七千四百五拾弗六拾八仙

備考上海蘇州間損失高ハ請領具借書中ニ詳キ